

Eureka XI

六年制通信 No.5 令和5年5月12日(金)号

青の洞門

ある TV ドラマで小学校の校庭に銅像が置かれている映像があって思い出したのですが、昔ほどの小学校にも二宮尊徳の銅像がありました。あれ、いつごろからか見なくなりましたね。君たちの小学校にはありましたか。あったら教えてほしいな。一説によると本を読みながら歩くのは危険だとか子どもに労働させるのはよくないとか、そんな理由で撤去が進んだらしいのですが、まさかね。薪を背負って本を読みながら歩く姿を見て普通は感心しますからね。二宮尊徳は貧しさゆえに弟が親戚に預けられるのを、自分が働くから家に置いてほしいと言った立派な子どもです。大人になって農政家として大成し、内村鑑三の『代表的日本人』にも「農民聖者」と紹介されています。

弟のエピソードは、以前戦前の国語の教科書に何が載っていたのかを調べた時に読んだ記憶があります。大正時代に作られた「尋常小学校国語読本」から抜粋したものを読んで、いたく感動したのを覚えています。当時のメモによると、富士山の高さが一万二千五百尺と書いてあります。面白いですね。ちなみに義務教育で教科書の無償給与が完了したのは昭和40年代だったと思います。それ以前は有料ですから、昭和の初めなどは買うことも困難なくらい貧しい家庭もたくさんあったはずです。ですから、村のお金持ちが買って学校に寄付したり、兄や姉の教科書は当然弟妹が使ったり、弟妹のない子は使い終わった教科書を学校に残していったり、そんな工夫があったと聞きます。ですから、頻繁に教科書が改訂され内容が変わると困るのですね。記録では大正6年から昭和15年までの24年間で改訂が行われたのは1回だけです。

私の記憶とメモから少し紹介すると、当時の教科書には日本だけでなく外国の偉人の話もたくさん載っていました。ナイチンゲールやダーウィンもあったはずです。市井の人であっても若い時から非常に苦勞をし、挫折をしても決してへこたれず、世のため人のために尽くす人の話が多い気がします。人はどうあるべきかということを考えさせる先達の例が多く載っているように思います。また、文語体を小学5年生で読ませています。「旅僧もまた主人夫婦の情心にしみて、そゞろに別れがたき思あり。されどかくて何時まで留まるべき身ぞと、心強くも立ち去りけり」、例えばこんな文章を読んでいるわけです。さらに、先生も児童も皆、言葉遣いが丁寧で上品です。

また、「青の洞門」の話が載っているのにも感心した記憶があります。これは実在の人物で禅海という僧が、川沿いの危険な道を回避できるようにとトンネルを掘った話です。江戸時代に30年の歳月を経て完成させたということです。禅海の掘ったトンネルは現在も大分県中津市に実在します。もちろん整備されていますから彼のノミの痕

跡はわずかに残る程度らしいですが、それでも観光地になっているようですよ。私がこの話を知っていたのは菊池寛の『恩讐の彼方に』を読んでいたからで、この本のモデルが禅海和尚なのですね。菊池は主人公の名を了海と変え、全く別の物語に仕上げているが、人力でトンネルを掘る様子は禅海和尚の実話そのままですね。皆さんも一度読んでごらん下さい。あと、仏教界の宝と言われる「一切経」を出版した鐵眼（てっげん）の話もあったはず。「一切経」は数千巻もあるらしく出版には膨大な費用が掛かるので、鐵眼は何年もかけて各地から寄付を募るわけです。ところがようやく見通しがついたところへ大飢饉があったりして、せつかく貯めたお金を復興に使う決意をするわけですね。出版計画は一からやり直しなわけです。確かもう一度そんなことがあって、三度目によく出版することができた、そんな話だったと思います。禅海も鐵眼も私利私欲などなく世のため人のために地道な仕事を続けた人です。見事です。ね。

小学生のうちは知情意を育むことが大切だと思います。昔の教科書には知情意への配慮を強く感じます。知は知識です。情は、例えば病気に苦しむ人を見て心を痛めるその気持ち、可哀そうだと思う気持ち、桜を見て美しいと思う心、そういう心の動きのことです。意は、では自分は病人に寄り添う医者になろう、介護士になろう、桜の品種改良をしてもっと美しい桜をつくることのできる研究者になろう、そういうふうに考えることです。さて、諸君は自分の中の知情意をバランスよく育ててきましたか。

今週のおすすめ

・伊坂幸太郎 『フィッシュストーリー』（新潮文庫）

中、短篇四作が入っています。表題作はその一作です。英語で **fish story** と言えば「ホラ吹き」のことですが、以前開高健も言っていました。小説家は嘘つきで釣り師はホラ吹き、私はその両方を生業にしていると。私はこの小説を読んで、「バタフライエフェクト」という映画を思い出しました。直訳すると「蝶々の効果」ですが、この用語はある気象学者が「ブラジルで一羽の蝶が羽ばたいたら、それが遠因となってテキサスで竜巻が起こるか」と言ったことで有名になったのでしたかね。取るに足らない小さな出来事が回りまわって大きな現象につながることもある、そういう意味です。

『フィッシュストーリー』では最終的に地球規模のトラブルになるところを一人の女性が救うのですが、そもそもこの女性は飛行機に乗っているところをハイジャックされ死にかかったところをある男に助けられたのであり、さらにその男の父親はのちに妻になる女性を昔暴漢から助けたことがあり、どうして助けられたかと言えば女性の悲鳴が聞こえたからであり、音楽を聴きながら車に乗っていたのに悲鳴が聞こえたのは聴いていた歌には途中しばらく無音の状態があったからで、その歌のタイトルは「フィッシュストーリー」といって…。これらを時間軸も自由に四人の語り部に語らせ、最後一つにつなぎ合わされる物語に読者はカタルシスを感じるという仕組みになっています。伊坂さんはこういうの上手ですよ。『アヒルと鴨のコインロッカー』を読んだ時にも感じましたが、よくまあこんなプロットを思いつくものだと感心します。

BGMは はしだのりひこの 風 でした…。